ASSETS OF OUR LIVES

≪深い知識や教養を身につけ、誠実で優しい心を育てて豊かな人生を!!≫

今年の秋に、第二次世界大戦で犠牲になった「南方の激戦地での遺骨の収集と弔いの旅」の記事が多くの新聞に載っていました。まだ日本の戦後は続いています。南方で無念の死を遂げた人々の気持ちを抱き続けて、平和を守り続けてください。多くの新聞記事にこのような写真が載るということは、このままの政治では再びこのようなことが起こりうる時代になってきていると「新聞紙の記者たち」も感じているのです。**(カラーなのですが白黒で印刷しています)**

火の戦の残響

遺骨 過酷な密林に

ガダルカナル島 収容活動

急斜面 視界ゼロ 列を組み

旧日本軍将兵の遺骨約7千柱が、いまも取り残されているソロモン諸島の「ガダルカナル島」。真珠湾攻撃から75年を前に南洋を取材した9月初旬、収容活動に取り組むグループと出会った。密林の急斜面で、岩陰で、食料も援軍もない孤行軍に力尽きたとみられる遺骨が次々と見つかった。

遺骨がある場所を記した木のそばで、読経する崎津寛光さん（左）ら

背丈は2㍍を超しているだろうか。カンナに似た花が茂る密林の急斜面。そのくぼ地で、遺骨は見つかった。大腿、腰、脊椎……。

粘土質の地中約30㌢から、土の色を帯びた骨が次々と出てきた。「散乱していないから、埋葬されたのだと思います」。遺骨を収容しながら、作業班法士の山登孝則さん(28)は語った。

山登さんは現地の青年海外協力隊員で、迷えば危険だ。一行は地元パラナ村の協力で密林に連絡路を切り開き、移動時は列を組み、GPS（全地球測位システム）で緯度と経度を測った計17地点の番号を記した。

「今日はまだ楽」。そう言われていたはずだった。水3㍑は一日で尽くした。はき慣れた靴は、右の靴底が大口を開けた。

島で1942年8月から半年間ほど続いた攻防の末に撤退した旧日本軍の行路沿いで、近年続いている遺骨収容活動にボランティアで加わった。この活動に取り組むのは、従軍した将兵と遺族、有志からなる「全国ソロモン会」と、NPO法人「JYMA日本青年遺骨収集団」だ。

さらに、隣から2体が見つかった。一緒に出てきた軍服用ボタンにより、日本兵と分かった。歯や頭骨の脇に、ガラスの小瓶もあった。かすかに正露丸のような臭いが残っていた。

遺骨は3体とも北枕だった。「精いっぱいの供養だったんだろう」。収容活動の隊長で日蓮宗僧侶でもある崎津寛光さん(44)が袈裟に着替え、74年を経て収容した遺骨の前にぬかずき、法華経を読誦した。活動に加わった若者たちが、同年代だった戦死者を追悼するために「ふるさと」の歌を斉唱。その声は樹高20㍍におよぶ密林に響いた。

斜面の棚やひさしのように張り出した巨岩の陰からも、遺骨が見つかった。崎津さんはそのたびに袈裟をまとい、読経した。爆撃で吹き飛んだ遺体の一部らしき骨片も多く出てきた。

高低差350㍍の谷間。

死んだらそのままなんて

ガダルカナル島の尾根筋にある地元パラナ村の民家の軒下には、住民が密林から集めた手榴弾や壊れた機関銃、鉄かぶとなどが積み上げられていた。

「日本人はこのあたりを『ギフ』と呼んでいた」。村長のウィリーさん(49)がそう話した。太平洋戦争中、一帯は旧日本軍が「ギフ高地」と名付けた防衛拠点だった。

42年8月7日、[illegible]が海岸付近に建[illegible]飛行場を米軍が[illegible]防が始まった。[illegible]制空権の確保も[illegible]を上陸させ、地[illegible]を回り込んで島[illegible]ざした。だが、[illegible]の厳しさを無視[illegible]将兵は上陸した[illegible]島は「餓島」と[illegible]——死なない[illegible]たかる。通って[illegible]

1942年6月に雷撃を受けて沈没し、米軍に引きあげられた駆逐艦「菊月」。ソロモン諸島フロリダ島（❶）の海岸「トウキョウベイ」の上空からは、その朽ち果てた姿を確認できた＝本社機「あすか」（機長＝上野博、池田隆志、整備士＝松井充、航空電子装備担当＝熊倉隆広）から、横本弦撮影 グラフィック・山本美雪

現役時代の駆逐艦「菊月」＝1934年撮影

海上からみた「菊月」

激戦の海底 重なる沈

ソロモン諸島の首都・ホニアラ市の郊外に、墜落した戦闘機や遺棄された砲を集めた「博物館」が複数ある。その一つの館主の妻シルビアさん(48)は言った。「戦争がこの国に何を残したのか、と考えると悲しくなる」

サイパン、フィリピン、沖縄。物資を断たれた旧日本軍は壊滅が続いた。「敗北の事実を隠すことにのみ真剣で……日本軍は自分に都合のよい推測によって敵を評価するという悪弊を、いつまでも国正し得なかった」。自らも従軍体験がある作家の故・五味川純平は著書「ガダルカナル」で、こう記している。

は、当時海軍が使った機材や石油タンクの残骸もさらされたままだ。太平洋の西半分、数千㎢の範囲には、旧日本軍が切り開いた滑走路の跡がある小島が点々と連なる。

密林の斜面、サンゴ礁の浅瀬……。墜落したのか、爆撃にあったのか。様々な所に零戦の残骸もあった。風雨にさらされた姿は、墓標のようにも見えた。

太平洋戦争などをめぐる主な動き

1939年9月	独軍がポーランド侵攻。第2次大戦始まる
40年9月	ベルリンで日独伊三国同盟の調印
41年4月	モスクワで日ソ中立条約の調印
12月	8日、日本軍がマレー半島上陸、真珠湾攻撃
42年2月	日本軍がシンガポールを占領
6月	ミッドウェー海戦で日本軍が主力艦隊を失う
8月	米軍がガダルカナル島上陸。ソロモン海戦
43年2月	日本軍、ガダルカナル島から撤退
5月	アッツ島で日本軍が玉砕
9月	伊が無条件降伏
44年2月	米軍がトラック諸島を大規模空襲
7月	サイパン島の日本軍守備隊が全滅
8月	グアム島の日本軍守備隊が玉砕
11月	パラオ諸島のペリリュー島で守備隊が全滅